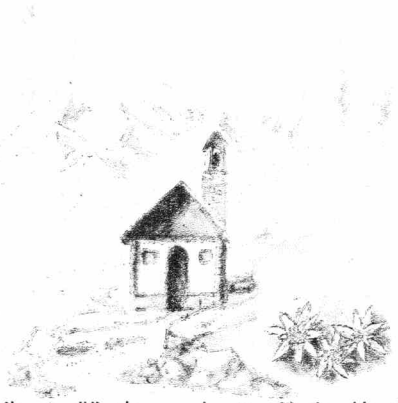
ほない歴史通信
第３６号
2005.9.1

自然に親しみ自然を守る

我が国では最近、知床が世界遺産になった。これは我が国に世界に誇る自然が残されており、我が国民が自然を愛する国民である事を、世界に知らせた点で素晴らしい事と思う。

我が大子町も自然がいっぱいである。水郡線沿線で最も美しいのは大子町だと多くの観光客は言う。また本来は暖帯に多い樫の木が大子には自然に生えている。これも大子が自然に恵まれている一つの証である。しかしこの自然も少しずつ失われている様に思われる。自然を楽しむには自然を大事にしなければならない。



自然に親しむ事と、自然を守る事との両立は、なかなか難しい。大自然の中に自由に入って散策したり、植物を採集したり蝶や昆虫を捕ったり出来たら、こんな楽しい事はない。今は国立公園や自然保護地区以外の大部分の山林・原野ではこのような親しみ方が出来る。春になれば山に入って山菜採り、秋にはキノコ狩りが出来る。しかし中にはマナーが守れず、珍しい植物があると、根こそぎ持ち去ってしまう者もいる。この辺でも岩松、春蘭、エビネなど殆ど姿を消してしまった。残念な事である。

最近、イタリアからアルプスを越えてオーストリアへの旅をする機会があった。世界で最も美しいと言われる山岳道路や湖水のある地方である。コルティナダンペットから舗装されたつづら折りの山岳道路に入る。我々のバスの外に、自家用車、バイクもあるが、一番多いのは若者の自転車だ。あの坂道を力走する。その根気と脚力には感心する。ヨーロッパの若者は元気だ。そんな事を感じている内に、駐車場に到着。

ここからは歩きだ。一応整備はされているが、そこは山道だから石ころもあり凹凸もある。二千メートル以上の高度だから木は無い。そのかわり高山植物が足下にまで生えている。

桔梗の様な藍色の花、白い五弁の花、そのほか黄、ピンク、空色など様々である。白い石灰岩の間に可憐に咲いている。四，五センチから十センチ位の花である。取ろうと思えば誰でもとれる。マナーの悪い国だったら、毎日何百人も登山するのだからたちまち全滅してしまうだろう。

この山をオーストリア側に下るとインスブルックになる。この辺りの山岳道路はよく整備されている。中でもグロースグロックナーは氷河のある山で、氷河のすぐ近くまでバスで登れる。ここも高山植物の宝庫で、人々が歩く道の脇に咲き誇っている。道からはみ出して歩く者もいない。自然に親しみ自然を大事にしている。見習うべきだと思う。自然を守る事が我が町の美しい景観を守る事になるのだから。（石井）

『大子風土記』雑感

飯島　満男

大子遊史の会代表の小澤囡彦先生より『大子風土記』の御恵贈に預かり、以来、目次をながめながら興味を覚えたところを、還童の水をすすりながら拾い読みし、楽しいひと時をすごしている。その内容は以前に刊行された『大子町史』の余滴とでも言うべきものと思われるが、いや、余滴という言葉は当たらない、それはまさに干天の慈雨であったという表現がふさわしい。

現代の人々にも伝説として語り継がれているもの（ほとんど記録が抹殺されてしまったといわれる地獄沢の惨劇など）、あるいは体験された方々がまだ健在であろう「栄ゆく村」の無声映画の話、現役として活躍中の町民が卒業した学校物語等々、江戸時代から近現代までの、文字どおり多岐にわたった興味深い内容がいっぱい。しかも文体も読みやすく、分量もほどよく一読するにそれほどの時間を要さない。

「ウン、そうだった」などとうなずきながら、あるいは「あ、そうだったのか」と教えられて読んだ人がどんなにたくさんいたことか、容易に想像できる。中でも個人的には、「霊能者　ワカサマ・おさやんのこと」が印象に残る。私自身が「取子」（拾われっ子）であり、ワカサマの話を聞いた体験があるからである。

大子町史関係の書籍は、通史編、資料編その他数多く出版されているが、それらは学者の研究に資するものが多い。しかし、『大子風土記』は一般の多くの人々に親しまれ、今後長く読み継がれる価値ある一本と考える。そうであるなら尚更に、刊行にはつきものの誤植、脱字は機会あるごとに何らかの形で補遺、訂正するのが読者に対する親切かと思われる。

以下は拾い読みをしながら気づいた点を、重箱の隅を楊子でほじくるようで、誠に恐縮ながら二、三挙げてみる。

二一七ページの関鉄之介の遺稿については、「千戌」は「壬戌」、「題於南隣舎」は「題於南隣獄舎」の誤植、脱字であることは下図と比較することで明白。一八六ページの七絶の読み下しが碑の裏面にあるというが、そのままの形で載せたものだろうか、「なんぞはからん」から改行するのが通例だが。訳の「稲妻形の坂道となった」では「未能匡」が生かされていない感あり、「まだまだ稲妻形の急坂ではあるが頂からの眺めは…」ぐらいか。

九四ページの「硯銘」では下段を見ることによって、「墨地」は「墨池」、「興」は「與」であることが確認できる。但し、「墨地」と表記する写本が茨城県立歴史館に現存する。昭和初期に深作某なる学者が筆写したものというが丁寧な書体とはいいかねる。尚「元禄十五年の序」とあるが、歴史館写本では「宝永三年丙戌六月　七十三翁　木下元高平之甫書乎御□之好青館」とある。手許に故あって大妻女子大の松村先生の読み下しがある。「義公の賜　小久慈硯　巌平らかに松垂れ　水瀉の雲現る（硯にこのような絵柄が彫刻されているのでしょう）近く墨地（学びの地という意と硯の墨池をかけた表現でしょうか）を永鎮書院に移さん、庶くは與同に寿に文に臨みて（書物に写すこと）倦まざらんことを」。次は小生の勝手意訳「義公の賜物である小久慈の硯は水なきときの硯上には松の模様が出、水を注ぐと雲模様が現れる。近々このお宝である硯を我が書斎に移し大事にしたい。そして願うことは硯と共に長生きし、本を読みかつ写し続けることに尽きる」。一四ページの「鹿待巌」で原文と照合すると、「滝二而」に「麓」の脱字あり。ここで紙数が尽きる。舌足らずの点は御寛容のほどを。

『大子風土記』を読んで

菊池　信也

『大子風土記』の発刊おめでとうございます。大子遊史の会の長年にわたる調査、研究が一冊の本として実を結んだこと、お祝いを申しあげます。私は「大子町ふるさと歴史講座」(平成十六年度)を受講しておりましたので、講座の中で諸先生方のお話を断片的には拝聴しておりましたが、ここに集大成されたことは大子町民にとって大変喜ばしいことと思います。本書が郷土大子町の歴史を後世に伝え、明日への発展の元気を与えるものとなるよう願っております。

さて、大子町は奥久慈県立公園の一角にあり、その風光の素晴らしさが人気を博し、東京をはじめ関東一円からの観光客が多く、高速道路の発達と車社会の発展により横浜・湘南・川崎等のナンバーが多く見られます。袋田の滝、久慈川の鮎釣り、大子温泉郷の露天風呂など高層ビル街で暮らす人々にとっては大きな魅力です。特に子供連れや定年後のご夫妻などにとっては大子温泉にひたり、りんご狩りを楽しみ、蕎麦をすすることはわくわくする思いでしょう。そこで、現在の奥久慈大子に住む人々の幸せな生活はどのような歴史をたどって形成されてきたのでしょうか。本書を読むと、そうした関心も生まれてきます。

本書は七十五項目から成っていますが、特に、水郡線関係の項目に興味をそそられました。

大子小学校の校庭に、水郡線開通に尽力した功労者の碑があります。この碑については、「大子町ふるさと歴史講座」の一環として行われた「大子町の文化財巡り」のなかで、小澤圀彦先生の案内と説明があり、そのなかに私の祖父菊池信太郎の名がありました。また私の家には、根本正揮毫の書があります。きっと二人は、酒を酌み交わしながら政治や鉄道開設策を論じ、根本が筆を執ったのではと思われます。昨年から石井喜志夫先生の古文書講座に参加していますが、この書を教材として提供し皆で解読を試みました。「暑中　百姓に生れし　われは　如何にても　避暑に行くなどは　夢にだも見ず　夏の日に田草　とる　苦を思へば　やすき勤めの　我身をぞ恥づ　根本　正」。かくして、子供のころから気になっていた額の文字の解読ができました。

また、二枚の大子駅の写真が出てきました。昭和二年常陸大子駅棟上時と完成時の写真です。当時の大子の人々にとって、鉄道・水郡線の開通は町をあげての快挙であったことでしょう。大子の発展は鉄道によってもたらされたといっても過言ではありません。

水戸、東京など町外との交流が盛んになるにつれて、文化・芸術分野でも発展がみられました。舞踊、華道、茶道、陶芸、詩吟、書道、絵画などの各分野で様々なグループが生まれ、師範・師匠と生徒・お弟子さんが多数誕生しました。豊かな文化的風土をそなえた大子町だからこそ、毎年開催される大子町芸術祭は人気があるのでしょう。

大子町には、日本三大名瀑のひとつ袋田の滝がありますが、その滝を題材にして毎年二月に開催され、今年で第二十一回を迎えた全国氷瀑俳句大会があります。北は北海道から南は九州までの全国から約一千句の投句があり、俳句大会当日の来場者は百人を超えております。奥久慈大子はまさに俳句の里でもありまして、豊かな自然は俳句の題材に事欠かないところであります。

『大子風土記』が町内の各家庭に必携の本となり、町民必読の本となることを、また、酒の席であるいは家庭団欒のときに大子の歴史が話題となり、多くの町民の関心事となることを願っております。

黒沢小学校の校庭の鈴懸けの木

（飯村　尋道）

鈴懸の径

友と語らん　鈴懸（すずかけ）の径（みち）
通いなれたる　学校（まなびや）の街
やさしの小鈴　葉かげに鳴れば
夢はかえるよ　鈴懸の径

『鈴懸の径』は、戦時中の昭和十七年に歌手の灰田勝彦が歌った流行歌である。鈴懸はプラタナスのことで、日本には明治の初めに移入されて街路樹として各地に植えられた。この『鈴懸の径』は、灰田勝彦の母校である立教大学前の鈴懸の並木をイメージして作られたと伝えられる。

さて、黒沢小学校には象徴ともいうべき二本の鈴懸の大木がある。気品に満ちた白い木肌の幹といい根張りといい、実に見事で貴婦人の風格がある。およそ百年、黒沢小学校に学ぶ多くの子供たちを見守り続けている。

休み時間、あの鈴懸の根元で、友と語らう幼な子を、あるいは鬼ごっこや隠れんぼで駆け回る子を、また、いじめっ子にあい鈴懸の木陰に隠れてそっと泣いた子も大勢いただろう。この鈴懸の木はそんな子供たちの喜怒哀楽をずっと見てきたのである。

このプラタナスを植えたのは上郷馬場の人、松浦斤也氏である。松浦氏は、明治二十一年二月一日、黒沢村中郷に生まれる。大正三年、茨城県師範学校を卒業し大正から昭和初期にかけて町付尋常高等小学校に奉職、昭和六年に退職し、同十年に村収入役に就く。以来、同三十年の町村合併まで二十年間、収入役として村政に尽くした逸材である。

先日、上郷馬場の松浦家を訪ね、斤也氏の遺した昭和五年の当用日記を見させていただいた。日記によると、プラタナスを植えたのは『昭和五年五月十七日』のことである。『晴、二十二度。第五時、高三児童を督して自宅の井戸端側にあって作物の蔭をするプラタナスを掘取って、校庭へ植えた。夕方、高梨先生からお茶菓の馳走』と、記されてある。高梨先生とは、昭和二年四月より下小川第一国民学校長に転出するまでの十七年間、母校でもある本校に奉職された高梨光保先生のことである。

温かく応対してくれた娘の松浦久枝さん（八十四歳）によると、「尋常三年生の頃だったか、高等科の生徒が二、三人来てプラタナスをかついで行くのを見た」という。

このプラタナスは、もともとは上郷白坂の大河原新寿さん（昭和二年三月、大子農学校卒）が、大子農学校から持ってきてくれたもので、自宅の屋敷の前の井戸端の脇に植えたそうだ。ところが、「あとで聞いたら、この木はデガグなる木で、ここサおいたら何もかもコサになってダメダッペということで、学校サ持って行った」という。

松浦斤也氏の『日記』に、『高三児童を督して』とある。そこで、当時（昭和五年五月十七日）、斤也先生が自宅に引き連れて来てこのプラタナスをかついで行った高等科三年生の生徒が、生存しているのかどうか調べてみたところ、なんと中郷カッタクポの飯村良男さん（八十九歳）が、「オレラが持ってきた」という。

飯村さんの話によると、「当時、高等科三年の子は五、六人しかいなかった。子供だったのでヨッタリ（四人）で交代しながら鷹ノ巣通ってかついで来た。持って来たのは吉ノ目の齋藤実さん、松久保の鈴木幹雄さん、カッタクポの飯村茂さんとオレ、下野宮の冨田六介さんもいた。他にもいた。プラタナスの苗は二本とも同じくらいで、丈は六尺（二メートル位）ぐらいで太さは湯呑みより細く四センチぐらいだった。いっぱいの土で根っこをつつんで持ってきた。学校の庭が狭かったので広めるのに木を移動した。どういう訳か左のプラタナスが太くなってデガグなった。あの時の高三の子は、今は、オレぐれえしか生きていねえ」という。

校庭のプラタナス（鈴懸の木）、これから大きな葉をつけ小鈴のような実を懸ける。その木陰の下で、今年もまた友と語り友と戯れる子供たちの姿を見守ってくれることでしょう。

歌声ひびく明るい町を目指して（二）

―大子町混声合唱団の足跡―

昭和二十九年（一九五四）春、大子町混声合唱団が発足した。指導者は大子中学校の音楽教師小野瀬光昭さん、中心的メンバーは川俣雄司さん、木村一夫さん、池田数和さんであった。この三人は大子中学校の同級生で、いわば部活動のような形で小野瀬さんの熱心な合唱指導を受けていた。もう一人の音楽教師本多久康さんの指導も重なり、大子中学校は、茨城県の合唱コンクールでは水戸第二中学校や茨城大学付属中学校と常に上位を争っていたという（小澤圀彦氏談）。

三人ともそうした教師の影響を受けて合唱のおもしろさに引き込まれていくのだが、三人のなかでは、とくに川俣さんが異色の存在であった。大子一高を卒業しただけで、とくに音楽の専門学校で学んだわけでもなく、独学で音楽の知識と技量を身に付けていく。家業は履物屋であったが、卒業後は、当時町内で唯一ピアノを教えるカワマタ音楽教室を主宰したほか、子供たちを集めてユーカリ会という合唱団を編成し、音楽活動に専念した。大子町混声合唱団にとっても不可欠な存在で、選曲、合唱指導、指揮、作曲と多方面にわたって活躍することになる。

合唱団の初代団長には、古澤慎也さんが就任した。川俣さん達より五年ほど先輩の古澤さんは、当時文化活動を育てることに意欲的に取り組んでいたようで、例えば大子優秀映画鑑賞会を組織し、希望者を募って郡山市や水戸市へよく見に行ったという。合唱団結成の動きは、その古澤さんの琴線に触れたのかもしれない。合唱そのものはやらない古澤さんが団長を引き受け、その運営に携わるのである。

口コミで団員を募り、発足当初は七人ほどであったという。大子中学校の音楽室を会場にして、毎週土曜日、午後七時から九時まで練習を行った。合唱のよさは混声にあるとして、少人数ながら最初から混声合唱の形をとり、伴奏は小野瀬先生やピアノが弾ける生徒が務めた。とくに規則や会費もなく、合唱好きが集まって団員自身が合唱を楽しむことが基本であった。

さて、石島康雄さんが新いばらき新聞大子支局に赴任したのは、昭和三十一年である。前任地の大宮支局に勤務していた時に何度か取材で大子町を訪れたことはあったようだが、一町民として生活し、仕事をするのは初めてであった。明野町出身の石島さんにとって最初の印象は「窒息する感じで、半分はやりきれない気持ち」があったという。しかし町内を歩き、いろいろな人に会って赴任の挨拶をするなかでその印象は変わる。

「窒息しそうな雰囲気の中で、だけど山と川、自然は美しい。そこに合唱団があると聞いて、感動しましたね。こういう山の中に歌声があることに。その前後、大子は文化果つる町だなんて水戸で友達がみんな言うんでそんなことあるのかと。来てみるといろんな文化活動があって、大子は捨てたもんではない、水戸以北では一番いい町だと、文化水準も高いと、そう思いました」、と回顧している。

石島さん自身音楽が好きで、青年時代にはとくにクラシックに傾倒したようである。現に、赴任してまだ間もない頃、石島さんは早くも大子音楽愛好会（会長は益子善二郎さん）を組織している。資金を出し合ってパイオニアのステレオを購入し、各自がレコードを持ち寄り、大子信用組合二階の会議室を会場にして定期的にクラシック音楽を鑑賞したという。

下館市出身の古澤さんとは、郷里が近いのですぐに親交を結んだ。団長の交代は、もはや時間の問題であった。（斎藤）

塩吹岩穴の観音様

大子町後冥賀（うしろみょうが）の中程の道路沿いに「塩吹岩の観音像入口」という真新しい案内碑が建っている。その碑の裏側に「古くから岩盤より吹き出る塩をなめると、お乳の出がよくなるといわれ、そのいい伝えを聞き、遠方より多くの人が訪れた」とある。

塩吹き岩穴は、通称「観音山」と呼ばれている山頂近くにある。間口は約一〇メートル、高さ約二メートル、奥行き約四メートルの小さな岩穴である。

この岩穴に古くから観音様が安置されていたが、昭和初期の頃行方不明になった。現在、観音様は二体祀られている。一体は高さ四七センチの鉄製で錆に覆われ、わずかに青い着色のあとが残っている。右手にお経のようなものを持っている。案内碑の建立者菊池賢一さんの話によると、昭和六〇年頃奉納されたものであるという（奉納者不明）。もう一体は高さ九八センチの真新しい立像で、化仏が付けられた宝冠を頭上にのせている。平成十六年二月二十九日後冥賀下組と銘記があり、後冥賀下組一七軒の人達が浄財を出しあって安置したものである。

観音様を参詣し、塩をなめると、母乳がよく出るとのことからこの観音様は「乳出し観音」と呼ばれている。

縁日は、かつては旧盆の八月十七日に行っていたが、現在は七月の第二日曜日に実施している。（小澤）

編集後記

今年の夏の話題は、まず突然の衆議院総選挙ではありませんか。従来の選挙の形態を変え、党公約（マニフェスト）を重視する大きな分岐点になる選挙になるのではと期待するものであります。

さて、今年の三月に出版しました『大子風土記』については、本紙の二、三ページに取手市在住の飯島様、大子町久野瀬在住の菊池様からの感想文を掲載しましたが、お二人には厚く御礼申し上げます。茨城新聞に『大子風土記』の紹介もあってか、町内外の方々から多くの購入希望の連絡がありまして好評のうちに完売いたしました。完売後も多くの購入希望の連絡ありましたが、お断りしている状況です。読んでみたい方は、図書館「プチ・ソフィア」及び大子町立中央公民館内歴史資料室に備え付けてありますので、是非ご利用ください。

時節柄、夏の疲れがでるころですので、読者の皆様にはご自愛のほどお願い申し上げます。

（鈴木）

編集人　斎藤　典生（茨城大学人文学部）
野内　正美（茨城県立大子清流高校）
石井喜志夫（元　教員）
小澤　圀彦（元　教員）
吉成　英文（大子町立給食センター）
鈴木　徹（大子町社会教育課）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
〒319-3551 ☎0295(72)2627